

## — 離島と教育 —

教育学研究科 芸術・スポーツ系学修コース  
0714840280 大学院 2 年 本坊真衣子

はじめに

私は大学院入学前、徳之島と奄美大島で臨時的任用教員として教育現場で働く機会があった。これら離島はそれぞれ独自の文化、言語を用いており、鹿児島県を地元とするで私も馴染みのない習慣、食、文化に出会いその違いに驚いた。太平洋と東シナ海に囲まれた南北約 600 キロメートルにわたって点在する 28 の離島とともに成り立っている鹿児島県は、離島問題を切り離して考えることはできない。今回この太平洋島嶼学特論を通して海外における離島での研修から、鹿児島とミクロネシアの離島の違いを把握し離島教育について考えていきたい。

### 1. ミクロネシア連邦について

ミクロネシア連邦は人口約 10 万人、国土面積国土面積 700 km<sup>2</sup>（奄美大島と同規模）で太平洋の赤道の北半球に沿って 780 万 km<sup>2</sup>以上の海域に点在する 607 の小さな島と環礁からなり立っている。ヤップ、チューク、ポンペイ、コスラエラこれら 4 つの州があり、今回私たちが訪れたチューク州は陸地面積 88 km<sup>2</sup>、7 つの大きな島からなる群島である。気候は海洋性熱帯気候に属し 1 年を通して温暖で一定。人種的にはミクロネシア系とポリネシア系が混在し、各地域で異なる習慣や伝統が深く根ざしている。公用語は英語が用いられているが、8 つの主な固有言語が存在している。今回の研修でお世話になった方々は英語とチューク語を話していた。また、戦前日本から植民地支配を受けていた影響で「でんき」「しゃもじ」「ちりがみ」など日本語がそのまま現地語として今でも使用されている。宗教はキリスト教で、ローマカトリックとプロテスタントの割合はややカトリックの方が少し上回っているがほぼ同等で、残り数パー



図1 チューク州ウエノ島 売店



図2 ウエノ島 スカートを売る女性グループ

セントにモルモン、バプティスト等他の教派も存在している。

訪問したピス島では主食は白米、パンノキ、バナナ、芋のココナッツミルク煮などで種類が豊富である。副食は漁でとれた魚中心で他にも鶏、豚、ウミガメ、犬等を家畜として飼育し食している。調理方法は焼く、少量の油で揚げ炒める、ココナッツミルクで煮るといったようにシンプルなものとなっている。また、乾麺が普及しておりキムチラーメンのような料理が食卓にのぼることも多かった。これには冬瓜や白菜キムチなど野菜が多く白米にかけて食べるととてもおいしかった。ココナッツは料理だけでなくジュースは日常の飲み物として利用され、種の中のゼリー状の皮はスプーンでくり抜き砂糖をまぶすと絶品デザートとなる。食べ終わったヤシの実はきれいに削りかまどの燃料となり、その他残飯はすべて家畜に与えられ処理されている。しかしその他、洗剤やガソリンオイルなどの容器類、乾麺のビニール袋類、缶詰の空き缶等、ピス島以外から持ち込まれた家庭ごみは、家の敷地外に放置か海へ放流されているのが現状である。これはウエノ島のチューク国際空港周辺も同じような状況でゴミ問題、環境教育の認識は日本に比べると低いと感じた。

## 2. ピス島と学校

研修3日目、ピス島唯一の学校を訪問した。クラス編成は8クラスで、日本でいうと幼稚部から中学部にあたる。校舎は2棟からなり机椅子は海外からの支援でしっかりした物が各クラスに設置されていた。グラウンドは芝生のような草におおわれており遊具のようなものはない。校舎周辺に畑が作られ学校農園として運営されていた時期もあったが今はすたれているとのことだった。またこの日は平日にも関わらず学校は休校状態で、子どもたちはおろか教員も誰もいない学校への学校訪問となった。理由はその日の朝激しい雨が降っていたため教師が学校に行くことを拒否したからという冗談のような理由だった。このような現状にさらに拍車をかけている問題が子どもたちの島外への流出である。良識ある親たちは、ピス島の学校教育に落胆し、子どもがよりよい教育を受けられるよう親戚を頼って都市部（グアム等）に出してそこから学校に通わせているのだ。それはまるで島嶼学概論 I で三島村の研修時に学校の教頭先生から話を聞いた「受験対策は鹿児島



図3 チューク州ピス島 学校校舎と校庭



図4 ピス島 6年生の教室

島市内の塾で行う。」と重なる部分がある。しかし根本的に違うのは、三島村の先生方は限られたスタッフで協力しあい、島でできる最高の教育を子どもたちのために行いたいという高い意識をもって教育に取り組まれている。つまり島で出来ることを最大限に取り組み、出来ないことを島外でというスタンスをとっている。しかしピス島では、このような意識や学校を正常に運営する組織が育っていないというのが現実である。日本に帰国前、グアムで実際にピス島を離れて学校に通っている子どもたちに話を聞く機会があった。どの子もピス島を懐かしみ愛していることピス島に戻りたいことを話していた。自分の生まれた島を離れて学校に通わなければならない現実はとても悲しく残念にだった。離島は都市部と違い人が集まりにくい。いい人材はどうしても都市部に集中してしまう。教育には多額の予算と時間が必要である。取り組んでもすぐに結果が表れないという難しさがある。ピス島の学校には机等学校の備品や資材はある程度のものが準備されている様子であるが、学校職員の意識の低さから子どもたちから教育の機会を奪っている。本当に必要な支援は現地で学校を確実に運営できる職員を育てることであり、それは物資を支援することよりもはるかに難易度が高い。支援のあり方はこういうことなのではないだろうか。そして教育について子どもたちのために今、島で出来ることはとは何なのか、大人たちが真剣に向き合い考えていくことがここピス島には必要である。

### 3. グアム大学での講義

研修6日目グアム大学でユキコ・イノウエスミス教授（教育学）の講義を受けた。グアムでは教員不足から教員免許を所持していない教員が地方で教育を行っているということや、その一方で教員の意識が高く大学院への進学率が高いという話を聞いた。進学率が高い背景として修士、博士取得者への給与面での特別配慮が日本とは比べ物にならないほど優遇されているということ、女性の社会進出を親戚一同で支え、女性は結婚出産後も復職するだけでなく夫婦そろって進学し修士をとることに意欲的なのである。これはグアムがアメリカに統治されていることが大きく影響している。日本は今やつきになって女性の社会進出を政策で行っていて、他にも少子化問題等、女性が安心して子どもを産み社会復帰を目指せる社会体制を作ろうとしている。しかし核家族化が進み現代化してしまっている今の日本の現状では実現不可能だと思う。昔のように3世代同居や地域一体となって子どもを見守っていた時代であれば可能性はあるかもしれないが、今日本社会が女性の社会進出を受けとめるだけの体勢が出来上がっていないと感じる。保育施設を増やすことぐらいでは焼け石に水状態なのである。このようなところが先進国であっても日本はグアムには及ばないほど遅れているということを実感することができた。また、私の研究分野が美術教育であることからグアムにおける美術（芸術）教育の存在感についてについて質問したところ、教育学部の中には美術教員は配置されておらず芸術教育は他教科に比べ大分遅れている様子がかがえた。先にも述べたとおりグアムでは教員の意欲は高いが教員不足など教育体制が作られている最中で安定するにはまだ時間が必要である。残念なことであるがここが安定しないことには芸術教育へ

の対策は取られることはないと思う。かつての日本の美術教育がそうであったように。グアム大学で日本人女性として初めて教授となり現在も教育学の教鞭をとり続けているイノウエ教授の体験談を織り交ぜながらの講義とディスカッションは非常に興味深く刺激的なものとなった。

おわりに

はじめてミクロネシアで、チューク州ウエノ島から荒波に1時間もまれながら小さな屋根もないボートで訪れたピス島で、物にあふれる日本で生活しては得ることのできない自然と共存することの厳しさ、そこで求められる教育の本質、島での生活に不慣れな私たちに差しのべられた島民のみなさんの気遣いや温かさ、本当にたくさんのことを学ぶことができた。またグアム島でもイノウエ教授の講義をはじめ、観光都市かされている都市部と地方都市の離島での生活や文化の違いを体感できたことは大きな収穫だった。今回研究分野や年齢も全く違うメンバーでのこの7日間の海外研修は、自身の視野の狭さを実感し、仲間を思いやる心、学び合いの姿勢、様々なことに気づかされ多くのことを学ぶ好機となった。最後に、このようなすばらしい集中講義を開講し丁寧に私たちを指導してくださった山本宗立准教授をはじめ、本当の家族のように受け入れて歓迎してくださったピス島、グアム島の皆様、その他各所訪問先で対応してくださった皆様に、心から感謝の意を表したい。

参考 HP

ミクロネシア連邦政府観光局

<http://www.visit-micronesia.fm/jp/index.html> (2015/9/22)